

## 「ちいさな命」

竹崎律子

平成19年6月27日その日は真夏を思わせる強い日差しが降り注いでいました。10時ころから園庭で遊んでいた子どもたち(3歳児～5歳児)の遊びも、砂場や三輪車から徐々に水遊びへと移行していきました。保育士が水道のホースを握ると我先にと水に近づく子、水のアーチの下を潜り抜けたり、冷たい水をわざと頭からかけられに行く子、あわてて逃げる途中転んで泥だらけになっている子、遠くまで逃れて安全な場所から笑って見ている子等、子どもたちの歓声が保育園を包んでいました。梅雨の晴れ間の水遊びはどの子も夢中になる魔力に満ちていました。

夕方7時を過ぎた頃でしょうか。保育園から電話があり「チャボが1羽いないので探している」との事でした。5羽いるチャボの中でメスのマリーちゃんが姿を見せないというので心配になり、私も保育園に向かいました。日暮れもせまる時、園庭を探し回る一人の保育士の姿。「先ほどまで居残りの子どもも一緒に探したがどこにも見当たらない」という話の間にも、庭を囲っている塀の周辺、物置の下、園の外の道路、など思いつく箇所は全て探しました。門扉の下はチャボなら簡単に抜けられるけど、いつも他の4羽と行動を共にしているマリーちゃんが自分だけ外に出るなんて考えられないこと、真っ暗になってきた園庭で途方にくれてしまいました。「こうなったら、もう事故としか考えられないよね！何かの下敷きになってるとか…と遊具を移動させたり、三輪車の下を再度覗き込んだりしていた時、悲鳴が上がりました。そして、彼女が指差すところが変わり果てたマリーちゃんの姿がありました。

それは、園芸用の腰掛けて作業できる車の中でした。周りが厚くて硬いプラスチックで頑丈に作ってあり蓋がついています。チャボが自分で蓋を開けて入れるはずもなく、明らかに子どもの手による

チャボの死。この現実を目の当たりにして息を呑む思いでした。

“炎天下の狭い空間でどんなにか苦しかっただろう”“早く見つけていたら助かったかもしれない”“チャボを一輪車に乗せて遊んでた時に注意しとけば、こうならなかったかも”“昼間の時間に小屋に入れとけば、もっと早く気づいたのに”と、いろんな思いがどんどん私たちの頭を駆け巡ります。

マリーを、せめて今夜は家族と一緒に…と鶏小屋のいつもの居場所に入れると、すぐに「ちゃ太郎」が寄ってきてじっと見つめ、その目から涙を流し、小さな声で今まで聴いたことがない、つぶやくような鳴き方をしたのです。私たちもそんな様子を見るのは初めてで、本当に驚きました。

園庭に出るといつもチャボを追っかけまわしたり、ぎゅっと抱きしめたり、のんびり日向ぼっこを隣同士でしたり、幼虫やミミズを懸命に探したり、いろんな葉っぱを食べさせようとしたり、芋ほりに行った時でも、チャボが好きそうな虫をしっかりと袋に入れてお土産にしたり、園児たちは、年齢を重ねるほどにチャボに細かく気づき、仲良しになっていきます。今回の事故は本当にいつも身近にいたからこそ起きた事故と思います。こどもは遊びに夢中です。チャボが押し車の中に消えた途端、別の景色に目がいきチャボのことは忘れてしまったのでしょうか。幼いその経験からは、こんなことでチャボが死ぬなんて思いもしなかったことでしょうか。誰も現場を見てなくて、止められなかったことだけが心残りでした。

以下にその日に出た保護者宛のお便りを一部分掲載します。

### 【H19.6.28保護者へのお便り抜粋】

…朝から子どもたちにマリーちゃんを見せると、ジーっとその場から動かず見つめる子「チャボ死んじゃったんだー」



といいながら遊びに行く子、様々でした。全員そろったところで昨日の状況を話し、チャボが亡くなってしまったことを伝えました。「たくさん遊んでくれたチャボにありがとう」を言っていると自然と涙がぼろっと出る子どもたち、泣き声がだんだん大きくなったので、涙を止めて少し考えようと言いました。「マリーちゃんは病気でも、年を取ったから死んだのでもない、小さな箱の中に入れて、そこから出られずに熱くて苦しくて死んでしまったの、私たちみんながマリーちゃんの命を絶ってしまったんだよ！先生たちも押し車の中に入ってるのをわからなかったから助けられなかった！みんなも入っているのに気づいてなかったのかもしれないし、入れて遊んでいた人を見て、何も思わなかったのかもしれない、マリーちゃんはずっと生きられたはずなのにみんなで命を絶ってしまったんだから、次はこんなことにならないように生き残った4羽をしっかり守ってあげようになろう」と伝え、マリーちゃんをアジサイの花の下に埋めてもう一度「たくさん遊んでくれてありがとう」とお礼をいい手を合わせてお別れをしました。

マリーちゃんが“ちゃ太郎”のお嫁に来たとき、子どもたちが「あの子、目がくりっとしてて可愛いよ～美人さんね」と言っていたことが、ついこないだのことのようです。

5歳児さんたちは、最後までお墓の前からはなれず「おもちゃみたいに扱わないからね、うさぎさん（3歳児）やぱんださん（4歳児）がギュッて力を入れてだっこしたりしてたら優しくしてねって言うからね」とマリーちゃんに誓いまし

た、…

その日から4羽のチャボの鳴き声が元気がない小さな声になってきたのを、4歳児たちがすぐに感じたようです。マリーの子どもだった雌はそれまで産んでいた卵を全然産まなくなりました。

1ヶ月後の夏祭りの日、1年生になった卒園生たちがやってきて、開口一番「先生マリーは死んだと？」「どうして？」と矢継ぎ早の質問攻めです。いつも園の前を通学路にしている女の子は、マリーが亡くなってすぐ「1羽いないよ！」と母親に言っていたそうです。卒園してからもチャボに目を向けていてくれたんだと本当に嬉しくなりました。

あれからもうすぐ1年、春から異年齢のクラスに上がった3歳児、いたずら盛りの4歳児、当事者だった5歳児、それぞれの子どもたちに、伝えたい。

たった一つのかげがえのない命が、みんなの手によって守られていること、それは、チャボでも子どもたちでも同じだということ、死んだことで、こんなに周りの人がに悲しい気持ちになり、どんなに泣いても生き返らないこと、等等、あの事故を通して学んだことを語り継いでいきたいと思います。

\*肥後チャボ保存会誌

（一部500円、送料込み）09年春号から転載

（ひまわり保育園）

○会誌入手申込先：肥後ちゃぼ保存会

熊本市蓮台寺2-3-5 今村安孝

096 354 6501 090-3198-3452

E-mail imamura-y-dz@pref.kumamoto.lg.jp

